

異文化コミュニケーション研究所2006年度活動報告

雑誌名	異文化コミュニケーション研究
巻	19
ページ	121-138
発行年	2007-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000266/

異文化コミュニケーション研究所

2006年度活動概要

〈2006.4～2007.3〉

刊行物

- 林 史樹 『韓国がわかる 60 の風景』 明石書店
- 横田智美 編・「日本語スモールグループ・コミュニケーション A」 2005 年度履修者 著 『KUIS コミュニケーションガイドブック 2006 年版』 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所(非売品)

研究プロジェクト

- アメリカ研究プログラム
代表: 高杉忠明
- 日本のインドネシア人社会
代表: 奥島美夏
- 国立公文書館委託調査研究: 国内所在の「アジア歴史資料」調査研究
代表: 和田 純
- 戦前・戦後における日本の国際交流と文化外交
代表: 和田 純
- 千葉における多文化共生

学内講演会

- 第 44 回 (6 月 6 日) 《多文化共生の未来とジレンマ・5》「イスラーム教徒からみた西洋社会」
菊地達也(本学一般教育・専任講師)
- 第 45 回 (6 月 28 日) 《多文化共生の未来とジレンマ・6》「ベトナム『子どもの家』未来へのメッセージ」
小山道夫(NGO「ベトナムの『子どもの家』を支える会(JASS)」代表)

- 第46回(9月22日)「アジアの農村で、都市で、今何が起きているか——現場からアジアを見る: 現地 NGO を支援して 25 年、ACT の歩み」
鈴木真理(アジア・コミュニティ・センター 21 (ACC21) 事務局長代行・アジア・コミュニティ・トラスト (ACT) プログラム・オフィサー)
- 第47回(10月6日)「エイズ感染爆発と safe sex について話します」
本田美和子(国立国際医療センター内科医)
- 第48回(12月8日)「マサチューセッツから鹿児島へ——小説を通して異文化を探る旅」
ホリー・トムソン(作家・横浜市立大学講師)

異文研共同研究プロジェクト・ワークショップ

- 「日本のインドネシア人社会」第3回公開ワークショップ
「日本における暮らしの諸相——定住・結婚・教育」(2006年5月27日、於: 神田外語大学ミレニアムハウス)
- 「日本のインドネシア人社会」第4回公開ワークショップ
「インドネシア人の日本理解」(9月30日、於: 神田外語大学6号館)

その他の特別企画・協力企画

- 〈韓国文化院提供〉韓国伝統音楽特別講座(5月24日)
講師: 李 栄(韓国国立国楽院)
主催: 本学韓国語学科
(*韓国語・日本語同時通訳つき)
- 長編ドキュメンタリー映画『エドワード・サイド OUT OF PLACE』
上映会
(佐藤真監督・2005年シグロ作品)
主催: 本学「〈イスラムと西洋〉に関する教育の充実化」共同研究

異文化コミュニケーション研究所

2006年度活動報告

(1) 新刊本紹介

●林 史樹『韓国がわかる 60の風景』明石書店

本書は、60あまりの「風景」を通して韓国社会の断面を描いたコラム集である。これらは基本的に筆者の実体験をもとにしている。一つ一つは短い文章であるが、ここから感じたことを身のまわりのことに広げて考えたとき、それぞれ断片的であった風景が徐々に結ばれていく。それが翻って「韓国」理解につながり、他者理解につながるのではないだろうか。

筆者が1990年春から日本と韓国を往復して15年以上になる。その間、当地の移動生活者(流民)をおいかけて文化人類学調査を続けながらさまざまな風景を通りすぎてきたが、こうした風景は研究という枠を越えて「よい人生経験」、「生きるためのヒント」をも与えてくれる。だが、人間はその風景になじむにつれ、次第にそれについて考えなくなってゆくものだ。本書は、それらが完全に見慣れた風景になってしまう前に書きとめ、それを通して韓国に住む人々の喜び、怒り、哀しみ、笑い、悩みを共有し、もういちど韓国を、他者を、そして自分を振り返ることを促している。

(2) 研究プロジェクト紹介

●アメリカ研究プログラム(最終年度)

代表: 高杉忠明(本学英米語学科・教授)

研究分担者: ギブソン松井佳子(本学異文化コミュニケーション研究所・副
所長、英米語学科・教授)

異文化コミュニケーション研究 第19号(2007年)

福田守利(本学国際コミュニケーション学科・教授)

柳沼孝一郎(本学スペイン語学科・教授)

阪田恭代(本学国際コミュニケーション学科・助教授)

興梠一郎(本学中国語学科・助教授)

武田明典(本学一般教育・助教授)

黒崎 誠(本学英米語学科・講師)

榊本智子(本学国際コミュニケーション学科・講師)

吉田光宏(本学国際コミュニケーション学科・講師)

〈研究期間〉 2004年4月～2007年3月

〈研究概要〉 昨年度から引き続き行っている Adalberto Aguirre, Jr. and Jonathan H. Turner (2004), *American Ethnicity: The Dynamics and Consequences of Discrimination*. McGraw-Hill (4th edition) の翻訳作業をほぼ完了し、次年度前半の刊行をめざして進めている。

●日本のインドネシア人社会(最終年度)

代表: 奥島美夏(本学異文化コミュニケーション研究所・講師)

研究分担者: 安里和晃(リクルートワークス研究所・客員研究員)

池上重弘(静岡文化芸術大学・助教授)

坂井 隆(上智アジア文化研究所・研究員)

助川泰彦(東北大学・助教授)

ティルトスダルモ、リワント(インドネシア科学院社会文化研究所・上級研究員)

服部美奈(名古屋大学・助教授)

フェミナ・サギタ・ポルアロゴ(中央大学・非常勤講師)

吹原 豊(ファリス女子学院大学・講師)

プジアストゥティ、トリ・ヌケ(インドネシア科学院政策研究所・研究員)

神田外語大学異文化コミュニケーション研究所 2006-2007 年度活動報告

皆川厚一(本学国際言語文化学科・講師)

目黒 潮(アイ・ティ・フロンティア(株)・職員)

山口裕子(吉備国際大学・非常勤講師)

吉田正紀(日本大学・教授)

和田 純(本学異文化コミュニケーション研究所・所長、国際
コミュニケーション学科・教授)

*その他、研究補助者数名

〈研究期間〉 2004年4月～2007年3月

〈研究概要〉 2006年度はプロジェクトの最終年度として、2回の公開ワークショップを開催し(本誌下記参照)、研究成果集『日本のインドネシア人社会』(仮題)の刊行にむけて鋭意作業を進めている。また、次年度以降に予定している東アジアの経済統合と労働人流の動向などについても、準備調査・企画会議を随時おこなっている。

●国立公文書館委託調査研究: 国内所在の「アジア歴史資料」調査研究(新規)

代表: 和田 純(本学異文化コミュニケーション研究所・所長)

研究分担者: 土田宏成(本学一般教育・講師)

(3) ワークショップ記録

●「日本のインドネシア人社会」第3回公開ワークショップ「日本における暮らしの諸相——定住・結婚・教育」(5月27日、於: 神田外語大学ミレニアムハウス)

〈プログラム〉

報告1「長野県上田地方の日系インドネシア人——スマトラ北部出身者と

日系人社会の成立過程」

坂井 隆(上智大学アジア文化研究所・考古学)

報告2「日本・インドネシアの異文化結婚——在日インドネシア人家族と在ジャカルタ日本人家族の事例研究」

吉田正紀(日本大学・文化人類学)

報告3「中部地方におけるインドネシア人ムスリムコミュニティと宗教教育」

服部美奈(名古屋大学・教育学)

報告4「インドネシア人家事労働者のエンパワメントと帰国後の女性の地位について」

安里和晃(リクルートワークス研究所・経済学)

報告5「ハラール食品ネットワークの中間報告」

山口裕子(吉備国際大学・文化人類学)

報告6「研究工具の紹介——地図と統計資料の作成方法」

目黒 潮(アイ・ティ・フロンティア(株)・人文地理学)

●「日本のインドネシア人社会」第4回公開ワークショップ「インドネシア人の日本理解」

(9月30日、於: 神田外語大学6号館)

〈プログラム〉

報告1「在日バリ人会の宗教と芸能活動」

皆川厚一(神田外語大学・民族音楽)

報告2「インドネシアにおける『主婦』の概念」

フェミナ・サギタ・ポルアロゴ(中央大学・社会学)

報告3「大洗町定住インドネシア人の日本語学習に関する調査」

助川泰彦(東北大学・日本語教育)

吹原 豊(フェリス女学院大学・日本語教育)

報告4「日本とオーストラリアにおけるインドネシア人留学生の動向」

池上重弘(静岡文化芸術大学・文化人類学)

(4) 学内講演会報告

●第 44 回 (6 月 6 日) 《多文化共生の未来とジレンマ・5》「イスラーム教徒からみた西洋社会」

菊地達也(本学一般教育・専任講師)

2005 年 9 月にデンマーク紙が掲載したイスラーム教預言者ムハンマドの風刺画は、9.11 事件(米国同時多発テロ)以来欧米に広まったイスラーム・フォビア(イスラーム嫌い)への反動もあって、世界各地に激しい反発と抗議運動をひきおこした。この問題は、西欧とイスラーム教圏の宗教的・文化的亀裂を浮き彫りにし、宗教的価値観と表現の自由の相克という多文化社会の根源的問題を突きつけている。

イスラーム教徒は一枚岩であるかのように思われがちであるが、居住地域、民族、階級などによってイスラーム教徒個々人の考え方は多様である。特に「西洋」に対する態度は個人差が大きく、両義的であることも多い。たとえば、留学や労働のために西欧に移住したイスラーム教徒や、中東に住み続けながら西洋的生活・教育を経験した「進歩的な人々」は、西洋社会の価値観や国家制度を少なくともある程度把握している。よって、上記のムハンマド風刺画問題に際しては、彼らの多くは「自由も無制限ではなく、宗教の尊厳を考慮すべきである」と主張したものの、謝罪を要求する対象は現地社会やデンマーク政府ではなくあくまで新聞社と考える者もいたし、抗議運動だけでなく現地社会との対話をはかることに努力する者もいた。これに対して、中東のより一般的なイスラーム教徒や一部の原理主義者は、西洋社会に関する基礎情報が不足していることから、自国の政治・社会状況を基準にして「西欧の国家・社会がイスラーム教徒を差別・攻撃した」と判断する主張や流言に左右されやすいようである。

講師の菊地氏によれば、このような認識のずれを考える場合には、中東社会の被支配経験とそのなかで培われた西洋に対する屈折した思いに目を向ける必要がある。中東における近代化は、西洋、とくに英米による植民地化 / 西洋化と同時期に進行し、両者の境界線は見えにくくなっている。

すでに「西洋化」した国々では、西洋に由来する物質文化を享受し、西洋のより豊かな社会に憧れを感じつつも、かつては世界の中心であった自分たちの社会がそれを生み出せなかったこと、西洋の風下に立っていることに屈辱感を抱く者も多い。また、中東諸国の大半は独裁権力が支配しており、報道統制などがおこなわれ、メディアにおける他国への批判とは対照的に自国政府や宗教に関しては否定的言説がみられない。これに閉塞感を覚える者がいる一方で、このような状況の副産物として、キリスト教徒やユダヤ教徒に関する陰謀説が、日本では考えられないほどに社会的な力を持ってしまっている。中東の一般大衆が、西洋に由来する文化を享受しながらも、西洋の実情をあまり知らないのは、そのせいでもある。

中東で反米感情が強まるのは、第3次中東戦争(1967年)以降、アメリカがイスラエルへの支援を強化してからであった。その後、アメリカが1991年の湾岸戦争、2001年のアフガン侵攻、2003年のイラク戦争と軍隊をイスラーム圏へ進めると、反米感情が強まり、アメリカへの怒りは鬱積し恐怖感が高まる。こうして、西洋全体に対する憧れと反感にアメリカへの怒りと恐怖が付け加わった。一方、この時期は中東でイスラーム原理主義が社会的、政治的に伸張していった時代でもあった。アメリカの中東政策に不満を持ちながらも、その圧倒的な力に恐怖するだけであった中東において、ビン・ラーディンへの支民衆の持がある程度集まった理由の一つには、彼が復讐を唱えて敢然と恐るべき超大国に立ち向かったことがあるだろう。

ビン・ラーディンの主張の原点は、1949年にアメリカに留学し同国の物質主義と墮落を批判したエジプト人原理主義者サイイド・クトゥブ(1966年処刑)にある。クトゥブが西洋文化を否定したのは、西洋文化に無知な「東洋人」だったからではなく、西洋文化を十分に知ることができるエリート層に属していたからである。アル=カーイダの指導者たちの多くも同じような立場にあった。反西洋主義を喧伝する勢力も、西洋文化とイスラーム文化の橋渡しをしようとする在欧イスラーム教徒も、西洋を知っているイスラーム教徒である。西洋とイスラーム教圏との関係を左右するこの層には、今後も注目していかなければならないだろう。

〈参考〉

- 池内 恵 2002 『現代アラブの社会思想: 終末論とイスラーム主義』講談社現代新書
- 内藤正典 2006 『イスラーム戦争の時代: 暴力の連鎖をどう解くか』日本放送出版協会
- 西野正巳 編訳 2006 『ニュースの裏側がよくわかるイスラーム世界の人生相談』太陽出版

●第 45 回 (6 月 28 日) 《多文化共生の未来とジレンマ・6》「ベトナム『子どもの家』未来へのメッセージ」

小山道夫(NGO「ベトナムの『子どもの家』を支える会(JASS)」代表)

「ベトナムの『子どもの家』を支える会」(The Japanese Association of Supporting Streetchildren's Home in Vietnam; 略称 JASS) は、1992 年にたまたま小学校教員の研修旅行でベトナムを訪れた講師・小山氏が翌年単身で現地に渡り、これを支援する同僚たちとともに立ち上げた NGO である。東西冷戦が続き、長期にわたって南北に分断されたベトナムでは、1976 年の南北統一以降ベトナム国内外のボランティア活動が大幅な政治的制約を受けており、ベトナム人による NGO や宗教諸団体も活動を禁止されている。海外から来た各種 NGO も許可申請の便宜上北部のハノイ市に拠点を置くが、実際は南のホーチミン市周辺で活動するところが多く、これらの大都市圏から離れた中部地域にはほとんど NGO が存在していない。講師はあえてその中部に位置する古都フエ市で、「子どもの家」や障害児医療センターを 13 年にわたって運営してきた。

ベトナムでは日本軍の敗退による独立からほどなくベトナム戦争が始まり、1975 年に終結するまで混迷の時代が続いた。戦争や貧困の犠牲となってきた子供たちは、今も就職時に「親は(戦時中に)どっちについていたか」と尋ねられ、ベトコン(南ベトナム解放民族戦線)側であった者は能力がなくとも高い職位につく例も多いという。この構造からはじかれた家庭の子供たちがストリートチルドレンとなり、やくざなどの手下となって窃盗や

売春に従事させられている。講師もそのような子供たちがフエに150人ほどいることを知り、連れて帰って面倒をみるようになったが、なかには気ままに暮らしたいがために再び家出したり、幼少期に受けた暴力や犯罪の記憶などがトラウマとなって寮母に暴力を働いたりする子供もいたという。「子供の家」は現在100名ほどの児童を支援しながら多忙な日々を送り、子供たち一人一人の成長や家庭環境、情操教育や就職などに心を砕いている。その他、ピースボートや日本の各地方自治体の視察団や学生のスタディーツアーの受け入れも行っており、2001年には功績を認められてフエ市名誉市民賞を受賞した。

政府・民間とも日本人の支援諸団体が対象とするのは、ベトナムを含めた開発途上国である。小山氏はこれらの国々の多くでNGOが直面する問題「支援＝利権論」、すなわち各国家政府との関係や支援活動への圧力・妨害について指摘する。長らく一党独裁が続いたベトナム政府の場合は政治的汚職や賄賂の横行が日常化している。こうした国々では、海外の支援諸団体は現地に外貨や雇用をもたらす政府にとっても重要な利権となるため、税金をかけたたり、違法事項をでっちあげて資金や設備を接収したりすることもあるのだ。「子供の家」も警察などに電話を盗聴されたり、キリスト教などの少数派信徒をスタッフとして雇用していることで危険視されたりしているが、その対抗手段としては、世論を味方につけるべく年10回ほどテレビなどのメディアに登場して活動を紹介しているという。

もう1つ、すべての支援機関が最終ゴールとする「現地民の自立」について、講師は当初の10年間の活動予定を延長したものの、近い将来の全面撤退に備えて、現地スタッフの育成やレストラン開設、就職にむけたミッション、コンピューター、オートバイ修理などの技術訓練施設の充実などに力を入れている。外国人スタッフがなくなった後は、現地スタッフと子供たちが自力で運営し、政府や警察などの横槍もかわしてゆかねばならない。第三世界の人々における非営利活動の存続と展開は多くの困難が伴い、挫折する例も後を絶たないだけに、支援者たちが活動開始時から視座にいれるべき最重要課題となっている。

〈参考〉

ベトナムの『子どもの家』を支える会 (JASS): <http://www001.upp.so-net.ne.jp/jass/>
小山道夫 1999 『火焰樹の花——ベトナム・ストリート・チルドレン物語』 小学館

- 第 46 回 (9 月 22 日) 「アジアの農村で、都市で、今何が起きているか——現場からアジアを見る: 現地 NGO を支援して 25 年、ACT の歩み」

鈴木真理(アジア・コミュニティ・センター 21 (ACC21) 事務局
長代行・アジア・コミュニティ・トラスト (ACT) プログラム・
オフィサー)

本研究所の学生支援プロジェクトのひとつ「幕張チャリティフリマ @KUIS」(通称『募チャリ』、下記参照)は、本年 5 月に第 2 回目が開催されたが、学生主催者である「神田外語大学 CUP」の希望により収益金 65 万円が日本初の募金型公益信託「アジア・コミュニティ・トラスト (ACT)」に寄付された。今回の講演はその贈呈式にあわせて、ATC 事務局に依頼したものである。

世界の人口の過半数を占めるアジア地域には約 34 億人が暮らしており、1 日 1 ドル以下で生活するいわゆる「所得貧困者」層は 6.9 億人、栄養不良者が 5.2 億人、不就学者は 4,600 万人といわれる。こうした貧困の背景にはいくつかの共通する課題が見られる。例えば農村部では、インフラや環境の不備、「緑の革命」などで普及した外来の改良品種や肥料への対応、市場へのアクセス、高利貸し、フィリピンや南米にみるような土地所有制度の問題などである。行政制度や汚職といった政治・社会問題も課題であり、また、疾病や貧困から来る家庭内の不和・暴力、離婚・蒸発、児童の非行化などの精神面でのケアも必要とされる。

1979 年に発足したアジア・コミュニティ・トラストは、日本の大手信託銀行 5 社が受託者となって寄付金を受託・運用し、貧困に苦しむ人々の自助努力を支援する仕組みを日本で初めてつくった。以来 25 年にわたってインドネシア、フィリピンなどをはじめとするアジア 12 ヶ国に 398 件(総額

4億730万円)の助成支援をおこなっている。この方式の長所は、継続的な助成を確保しうることと、現地の政府や自治体を経由しないで現地のコミュニティや NGO に直接的な支援をできるという点である。

主な対象分野は(1)教育・青少年の育成、(2)医療・保険衛生・社会福祉、(3)農業の振興・社会開発、(4)文化の振興・学術研究、(5)自然環境の保護・人間環境の保全である。例えば2004年度は、インドネシア、フィリピン、ネパール、カンボジア4国で12件の事業があり、うち7件は青少年教育に関するものであった。ネパールでは古紙リサイクル工場を立ち上げ、収益を地域住民の雇用確保と児童教育の支援にあてており、フィリピンでは将来の農村地域の発展をになう若者層を組織化し、リーダーシップや起業を指導するなど、現地の人々が考え出した独自のアイデアに基づく多彩なプロジェクトが進められている。

講師の鈴木氏は2000年から「国際協力 NGO センター (JANIC)」に勤務し、2005年より「アジア・コミュニティ・センター21」理事、事務局長代行・事業を担当している。あわせて「アジア・コミュニティ・トラスト」事務局も2001年から担当しており、フィリピン、インドネシア、ネパール、カンボジア、インド、スリランカ等の現地 NGO が実施する事業発掘調査・モニタリング・評価を行うほか、企業・団体・個人などからの支援(会員、寄付者、特別基金設定者)と現地事業を結ぶ橋渡しをしている。

〈参考〉

公益信託アジア・コミュニティ・トラスト (ACT): www.acc21.org/act

●第47回(10月6日)「エイズ感染爆発と safe sex について話します」

本田美和子(国立国際医療センター内科医)

(*共同企画: KUIS BATON PROJECT)

世界の HIV 感染(以下「エイズ」とする)者は2005年末で約4,030万人といわれ、その過半数はサハラ砂漠以南のアフリカ(2,580万人)、第2位が南・東南アジア(740万人)が占めている(国連エイズ合同計画統計による)。

特に近年は中国やインドをはじめとするアジア地域の感染拡大が著しく、2010年までに世界最大のエイズ感染地域になると予想されている。先進諸国がエイズ予防・撲滅で患者数の低減に成功しているなか、日本では依然として増加傾向が続いており、2006年3月末で11,251人に達した。

このようにエイズが静かに、確実に日本社会に浸透しはじめた原因は、エイズに関する正確な基礎知識と予防努力がまだまだ浸透していないという点にある。学校教育の現場における性教育の曖昧さだけでなく、社会全体の認識が低迷しており、メディアの対応も1992年の「ストップエイズキャンペーン」以降はすっかり下火である。エイズ予防に欠かせないコンドーム使用や血液検査は徹底せず、クラミジアや淋病、梅毒など他の性感染症も急増中である。こうした現状のなかで、講師の本田医師はエイズ治療やカウンセリングに専門的に取り組み、糸井重里氏主宰のインターネット新聞「ほぼ日刊イトイ新聞」への「お医者さんと患者さん」の連載や、教育現場などでの講演を通じて、エイズ予防にむけた啓発にも精力的に取り組んでいる。

本田医師によると、治療現場にみる最近の著しい変化は2点あるという。第1は、以前から多かった男性同性愛・両性愛者に加えて女性患者も増えており、しかもその女性の大半は「ごくごく普通の女性」、すなわち、ごく一般的な生活を送る女子大生や主婦、会社員などであるという点である。配偶者や特定の恋人などとの長期的なつきあいからも感染する女性が増えているという事実は、それだけエイズが社会に浸透しはじめたことを意味している。

第2は、患者を支える社会制度が整い始め、新薬開発のおかげで治療法が劇的に進歩し、きちんと治療をしていれば患者が死に至るケースは激減した点である。とは言え、新薬は高価なうえに定期的で確実な服用が必須であるので、患者や周囲の精神的・社会経済的な準備ができてから始めることが不可欠である。先進諸国の場合、医療福祉制度を活用すれば経費のかなりの部分が公的負担でカバーされるが、それでも患者一人当たりの負担は大きく、社会の負担も膨大になる。日本の場合、全額自己負担すると月20万円ほどの負担となるが、健康保険があれば3割負担となるので6万

円、さらに居住する自治体から身体障害者手帳の交付を受ければ5~6千円の負担で済む。その点は患者への支援が進んでいると言えるが、他方、これは経費の大半を社会が負担しているという意味でもあり、将来もエイズ患者が増加の一途をたどるとすれば、日本の福祉制度は破綻しかねない。

本田医師の講演は、本学でエイズ防止をめざす学生グループ「KUIS BATON PROJECT」の希望から実現したものである。

エイズ拡大を食い止める最短の道は、「ごくごく普通の若者たち」の一人一人がエイズ防止の当事者としての自覚を持ち、確かな知識を蓄え、コンドームを確実に使用し、定期的にエイズ健診(各地の保健所で無料で実施)を受け、友人にも呼びかけていくこと以外にない。

(参考)

本田美和子 2006 『エイズ感染爆発と safe sex について話します』朝日出版社

●第48回(12月8日)「マサチューセッツから鹿児島へ——小説を通して異文化を探る旅」

ホリー・トムソン(作家・横浜市立大学講師)

ホリー・トムソン氏は「多文化小説 Intercultural Novel」という現代的ジャンルで著名になった作家であり、日本各地の大学や各種機関で創作(クリエイティブ・ライティング)も教えてきた。彼女の処女作 *Ash* (『灰』、Stone Bridge Press, 2001) は、彼女自身や家族・友人の実体験と、長年の海外生活で出会ったさまざまな風景から着想を得たフィクションとが織りなす繊細で美しい物語だ。

少女時代を過ごした日本で親友・ミエを事故で失い、助けられなかった自分を責め続けるケイトリンは、15年後に英語教師として日本へ戻ってくる。葛藤と向きあおうとしながら、他方では重圧から逃れるために自分にも周囲にも嘘をつき続ける彼女の将来は、赴任地である鹿児島県桜島に降る火山灰のように暗澹としてみえたが、そこで彼女は日本人とアメリカ人の両親をもつ少女・ナオミと出会う。多感な思春期を迎えて二つのアイデンティティの間で戸惑い、理解者を求めるナオミとともに、ケイトリンは

死者の魂が年に一度帰郷するといわれるお盆祭りを観に京都へ向かう…主題は人間の魂の彷徨と再生という普遍的なものであるが、それが読者の共感を呼んだばかりでなく、背景描写として緻密に書き込まれた鹿児島と京都の風物詩や日常生活が日本や文化間摩擦などの諸問題を知るうえでも有益な資料として高く評価されている。

この本に登場するさまざまな場面は講師自身が訪れた日本各地や中国、ソ連などの風景そのものでありながら、主人公たちとその体験は自分だけでなくその家族や友人の観察から生まれたり、あるいは完全に架空の人物であったりするという。例えば、ケイトリンの親友の溺死は蘇州の寺を旅行中に偶然目にした事件がもとになった。庭園の池のほとりで遊んでいた現地の少女たちのうち一人が池に落ち、別な一人は驚きのあまり動けず、他の仲間が大人を呼んできて助け上げるまでただ凍りついていた。このときの場面が後年、何百という断片的なプロットを生み出すことになる。さらに細部を肉付けするために、講師は日本の景観や文化事情だけでなく、登場人物たちのライフヒストリーのファイルも丹念に作っていった。ナオミについては日本社会における外国人児童や混血児の取材も重ね、想像を膨らませてゆくうちに彼女の両親の出会いにまでさかのぼり、ついには独立したもうひとつの物語が生まれた (*The Broken Bridge*)。

だが、多文化小説ならではの表現上の限界もある。例えば、登場人物たちが日本語ないし英語のどちらでしゃべっているのか、また日本語でも標準語と方言をどの場面で使いわけているのかなどかを、話の流れや文体を崩さぬように書きわけるのは難しい。また、「河童」「仏壇」「ラブホテル」などのように、日常のこまごまとした文化には訳や注釈をつけても説明しきれないものが多々ある。このように、著者の個人芸ともいえる工夫によって小説が大きく左右されると同時に、誰を読者に想定し何を伝えたいのかによって戦略的に使用言語を選ぶことも必要になる。

講師は次のようなメッセージで会をしめくくる。「多文化間小説の旅に出かけましょう——観察と体験の積み重ねから始まりフィクションという仕事を完成させるまでの旅へ。今度はあなたがご自分の多文化体験の物語を聞かせてくれる番です。」

〈参考〉

Holly Tompson (2001) *Ash*. (Stone Bridge Press)

——— *The Broken Bridge*. (出版社ウェブサイト「Ashの世界」) (www.stonebridge.com/brokenbridgefolder/Bloodlines.html).

(5) その他の特別企画

●第2回幕張チャリティフリマ @KUIS (通称『幕チャリ』) (5月20日～21日)

【主催】 神田外語大学 CUP

【協力】 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所

【スタッフ】 学生ボランティア約60名

【後援】 千葉市

【開催協力】 幕張公民館・幕張小学校・幕張町内会・幕張西公民館・幕張西自治会・真砂コミュニティセンター・美浜区役所・NPO法人 MaMA (幕張メディア・アソシエーツ)

【協賛】 イオン(株)・(株)アイエシトラベル・エムサービス(株)・(株)旺文社・(株)キッツ・(株)三京エンタープライズ・(株)千葉ロッテマリーンズ・(株)ドリマックス・テレビジョン・(株)ピエトロ・(株)プリティッシュ・ヒルズ・(株)マイタン・(株)毎日コミュニケーションズ・(株)マインドシェア・(株)幕張テクノガーデン・(株)幕張メッセ・キヤノンマーケティングジャパン(株)・キャドバリージャパン(株)・千葉中部読売会・東京ガス株式会社(幕張ビル)・日本出版販売(株)・富士通(株)・プレナ幕張・ホテルグリーンタワー幕張・ホテル ザ・マンハッタン・ホテルフランクス・丸善(株)・ユニリーバ・ジャパン(株)・レディーアフション Oh-lālā・ロジコムコーポレーション(株)

【広報協力】 あさひふれんど千葉・印度料理 シタール・駅前みはま整骨院・オリンピック幕張店・(株)オレンジ・ポップ 検見川浜南口店・(株)三徳幕張店・(株)幕張食品・カメラのきむら カルフル幕張店・カルフル幕

張・ガーデンウォーク幕張・きそば 寿々喜・サークル K サンクス幕張
駅北口店・スポーツクラブ ルネサンス幕張・スリーエフ(幕張駅北口
店)・セブンイレブン幕張店・NEWDAYS ミニ幕張店・ピエトロコルテ 幕
張店・ふじや・HAIR & MAKE EARTH 検見川浜店・マツダ歯科・峯デ
ンタルクリニック・美浜カルチャーセンター・(有)田川肉店

【出店協力】 あげほの・エトナコーヒー・蔵・PATISSERIE TARBS・ぶ
くぶく・バイメロンパン・和カフェ

昨年度に引き続き第2回を迎えた「幕チャリ」は、エイズ防止に取り組
む「KUIS BATON PROJECT」、幕張地域の町おこしをめざす「あいむ」
といった学生グループとも協働し、「幕チャリフェスタ 2006」として開催
された。多方面からの協力を得て約80万円の売り上げを得、うち65万円
をアジア・コミュニティ・トラストに寄付し(上記「学内講演会」第46回
参照)、残りは「幕チャリファンド」として今後の活動資金にあてることと
なった。

●KUIS BATON PROJECT

【主催】 KUIS BATON PROJECT

【助成】 ソニーマーケティング学生ボランティアファンド

【協力】 Act Against AIDS (ポスター提供)・市川明子(タンプラー・ポス
ターデザイン)・エイズ・サポート千葉(コンドーム提供)・エムサービス
(株)(販売)・加藤祐子(キャラクターデザイン)・神奈川県衛生研究所(相談
マップ提供)・東京都福祉保険局(グラフ提供)・千葉市保健所・日本ユニセ
フ協会 千葉県支部・船橋保健所(コンドーム提供)・杉田美奈(ロゴデザイ
ン)・福原聖人(リーフレットデザイン・ロゴデザイン)

ソニーマーケティングの助成を得て本年度より本格的に活動している当
学生グループは、学内における呼びかけや資料・コンドーム配布、マグ
カップのデザインと販売などをおこなっている。また、本学異文化コミュ

ニケーション研究所との共同企画で、国立国際医療センター・エイズ治療・研究開発センター医師である本田美和子氏を招聘し、講演会も開催した(上記「学内講演会」第47回参照)。